

大利根 川のフィールドミュージアム ニュースレター

## たかっぼ通信

第3号

発行：千葉県立中央博物館  
 大利根分館  
 大利根 川のフィールド  
 ミュージアム  
 たかっぼ通信/第3号  
 連絡先：〒287-0816  
 千葉県香取市佐原ハ4500  
 Tel 0478-56-0101  
 Fax 0478-56-1456  
<http://www.chiba-museum.jp/OTONE/>  
 2011年3月25日発行

CHIBA

## 水塚の調査範囲、ひろがる

川のフィールドミュージアム事業の二環として始まった「水塚調査隊」も3年目を終えようとしています。この間、調査範囲の拡大に伴って、水塚の「周辺」にも関心が広がってきました。

平成22年度の水塚調査は、境島・三島・大島・八筋川の4地区に加えて、筭島地区でも実施しました。第1回目は9月26日(日)で、記録的な猛暑も去り、快適な調査日和でした。参加者は職員を含め9名で、まず扇島地区で昨年度の補足調査を行い、1基の水塚(SOさん宅)を計測しました。倉は梁間2間×桁行3間で、一階の土間の一部を間仕切りして隠居部屋に改造してありました。この水塚には1m程度の土盛りが施されていますが、明治43年(1910)の洪水では、倉の戸の中程まで水位があがったと伝えられています。



扇島 SOさん宅の水塚

ついで、午後からは、今年度の調査範囲である境島・三島地区を踏査し、三島地区で2基の水塚を確認し

ましたが、境島地区では発見されませんでした。

境島・三島地区は、昭和35年(1960)から38年にかけて実施された常陸利根川の拡幅工事の際、集落の東側が工事範囲に含まれたため、多くの住戸が現在の堤防の南側にある自家農地を宅地に転用して移転しました。聞き取りによれば、移転前には多くの住戸に水塚が存在したものの、移転後の新居で水塚を築造した世帯はないとのこと。治水事業の進捗に伴って、水塚が消滅していくプロセスが端的に表されています。

第2回は10月31日(日)に行われました。この日は、前回所在を確認していた三島地区のOKさん宅で水塚の撮影・計測及び聞き取りを行いました。その後、三島・大島地区で水塚や土盛りの所在調査及び聴き取



大島 TKさん宅の水塚

り調査を行ったところ、大島地区で明瞭な水塚を1基(TKさん宅)発見しました。

この水塚は、梁間2間×桁行3間の切妻二階建てで、板壁の一部をトタン貼りにし、茅葺きから瓦葺きに変えた程度で、大規模な改造もなく、土盛りとあわせて、典型的な水塚の形をとどめています。聞き取りによれば、以前は味噌蔵に使用していたもので、水害時に水浸しになったこともあり、同家では水害のための備蓄は母屋の屋根裏で行っていたとのこと。また、同じ大島地区のSTさん宅ほかで土盛りが遺っているのを確認しました。STさん宅では、屋敷地の西側に横利根川の堤防と同



## 集落全体が水塚？

今回の調査範囲は、昨年度調査範囲である扇島地区に近い境島地区から三島・大島・八筋川地区を経て、弁島地区にまで拡がりました。こ

じ高さに盛り上げたという土盛りが遺っていました。

第3回は11月28日(日)に行われ、主に八筋川地区から弁島地区にかけて踏査し、水塚の分布を確認しました。第4回は12月19日(日)に行われ、前回までに確認された3基の水塚と2基の土盛りの撮影・計測及び聞取りを行いました。

のように調査範囲を拡げることができたのは、水塚の所在状況をつかむ踏査と該当する各戸で行った調査とにわけて、効率よく調査を進めたことによるとともに、この地域における水塚の残存件数が少なかったことも理由にあげられます。境島・三島地区では常陸利根川の拡幅工事によって少なからぬ数の水塚がすでに失われていましたが、大島・八筋川地区では、昨年度までの調査結果に比べて、水塚や土盛りの発見数は少なく、特に大島地区の北側や八筋川地区の北寄りには所在が確認できませんでした。また、弁島地区でも水塚の所在を確認できませんでした。

図1は、今回の調査範囲に水塚・土盛りの分布を示すとともに、東京湾の海水面を基準とする高さ1.1m以上のエリアを色分けして示したものです。但し、土地改良事業の影響を受けている圃場や近年客土して新たに宅地となった場所は除いています。まず、これまで調査してきた磯山・加藤洲・扇島地区に比べて、今回の調査範囲では水塚や土盛りの数が少ないことがお分かりいただけると思います。その中でも、特に水塚や土盛りが発見されなかったエリア

があります。  
 下の写真は八筋川地区北部の市街地のようですが、かつてのエンマ(江間)を舗装した市道と屋敷地の高低差が分かりただけでしよ

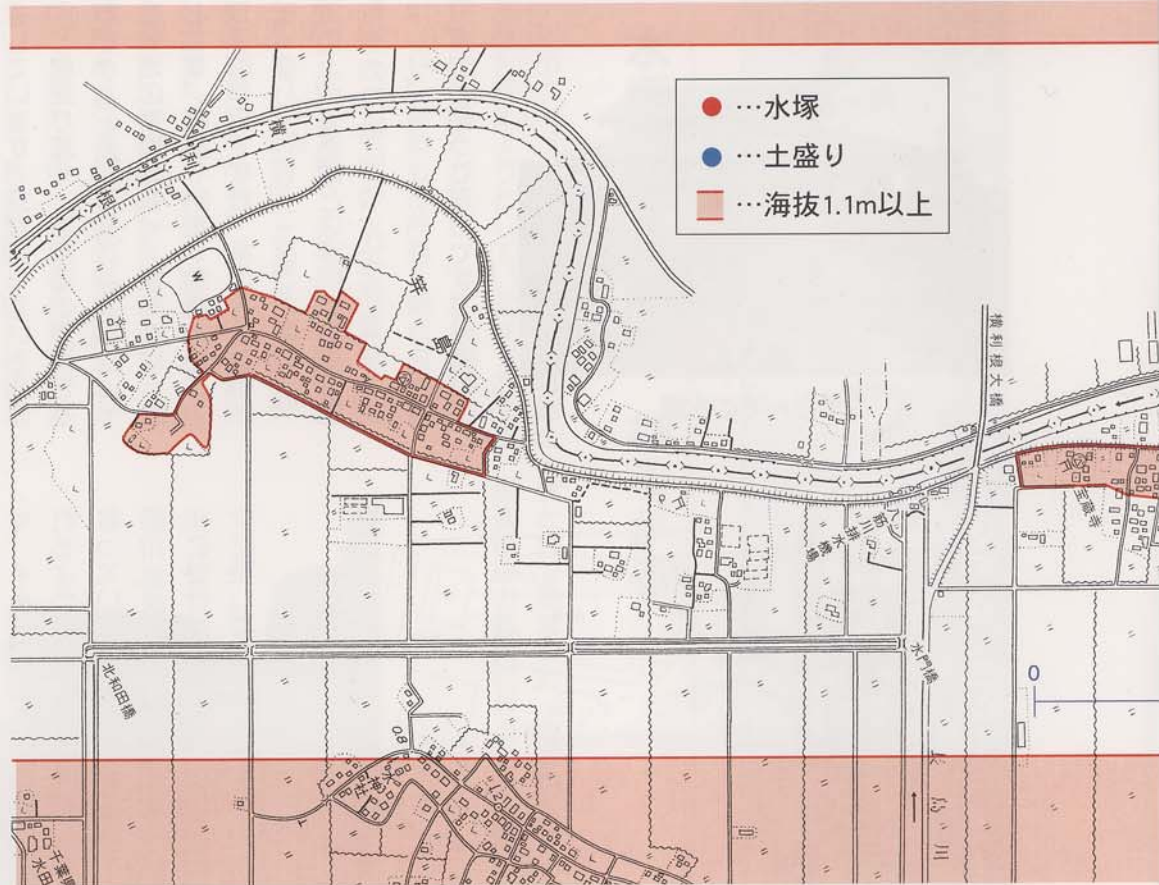


図1 今回の調査範囲と水塚の残存状況

つ。写真の場所では、屋敷地は市道に対して概ね0.8〜1m盛り上がっています。大島地区のKT家では屋敷地の南端にかつて倉があったものの、倉だけが土盛りされていたので



八筋川地区の市道と屋敷地

はなく、屋敷地全体として土盛りされており、屋敷地の上まで浸水したことはない、とのこと。  
 このことから、水塚や土盛りが遺るエリアと集落全体の標高が高く、水塚を必要としなかったと思われるエリアを比較すると、八筋川地区の3例を除き、おおむね海拔1.1mより高いか低いかで分けられていることが観察されます。

弁島地区の場合、海拔1.1m以上のエリアは、北東から南西に延びる微高地をなし、その上に多くの住戸があります。また、西側の住戸は、よ

発見されませんでした。  
 横利根川から隔たり、海拔も低い扇島・加藤洲・磯山地区では多くの水塚を確認する一方、横利根川に近く、おそらく堤防の決壊箇所に近い地区に、水塚が発見されないエリアが存在するというわけです。今後の調査の中で、注目してゆきたい事柄の一つでしょう。

### 堤防と一体の水塚

今回も、調査結果を踏まえて、特徴的な水塚を選び、測量調査を行いました。今回、その対象となったの

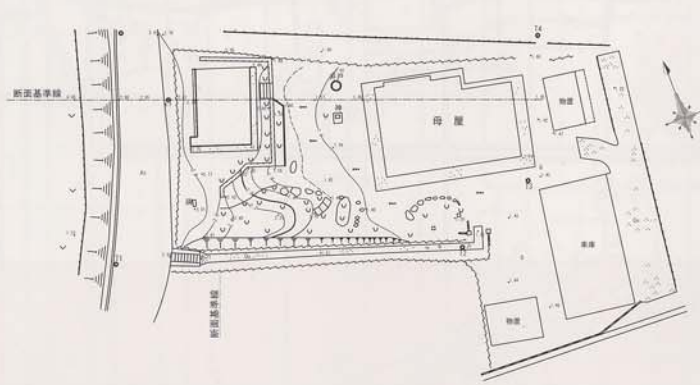


S Tさん宅の水塚と堤防



STさん宅の水塚

は、八筋川地区にあるSTさん宅に築かれた住居兼用の倉です。STさん宅は横利根川に並行する堤防に接しており、図IIにあるように、西北西から東南東への長軸方向に約28mあり、幅は約14〜20mあるL字型をなしています。倉が建っている西側ほど標高が高く、東京湾の海面を基準とすると約2.9mあります。一方、屋敷地の東縁は低く、標高は1.2mほどです。母屋や納屋、物置のあるエリアは平坦ですが、倉の手前で1.7m近く盛り上がり、土盛りの高さや、堤防上の道路面とはほぼ同じです。屋敷地の東縁には、かつてエンマがはしり、現存する納屋2棟から物資の搬出を行ったそうです。母屋の西



図II 平面図

側の庭園部分には、水神様と井戸があり、水神様は、高さ約1mのコンクリートの土台の上に鎮座しています。STさん宅の水塚には、これまで発見された水塚に無い特徴があります。それは、図IIIの断面図に見られるように、土盛りが堤防と一体になっていることです。そもそも、八筋川地区の古い屋敷地は、横利根川に並行する堤防や、直交するエンマに接しており、標高は1m前後に

なっています。たとえば、OMさん宅の水塚は屋敷地内のエンマに接する側にあり、さらに0.8mほど土盛りが施されています。これにたいして、STさん宅の水塚は、屋敷地内で最も堤防に近く、土盛りも1.7m近くあります。STさんのお話しによれば、祖父にあたる方が、毎年のように発生する洪水に悩まされたことから、屋敷地の堤防に接する側に堤防と同じ高さまで土盛りを施すことで、より水害に強いものになるようにしたとのことでした。なお、盛り土は浮島(茨城県稲敷市)方面から運んできたものと伝えられています。

同じ八筋川地区でも、TKさん



STさん宅での聞き取り調査

宅・OMさん方の水塚はエンマに接して建てられています。これは、日ごろの物資の出し入れの便を考慮したもので、エンマに降りる石段も設けられていました。これに対して、STさん宅の水塚は、屋敷地内で最も高い場所に建てられた代わりに、エンマから最も遠くなり、物資運搬の便を考慮したものではありません。



図III 断面図

さて、次年度は水塚調査隊も4年目を迎えます。皆様の御協力に感謝するとともに、引き続き、水塚を一つの手掛かりにして、水郷を魅力的なフィールドミュージアムにして参りたいと思います。



● 編集後記

たかつほ通信第3号をお届けします。23年度は水塚調査の範囲を長島・佐原二地区へと拡げてまいります。(内)